



新潟の高層ホテルの展望台から見る佐渡島はすぐ近くにあるように大きく黒々と横たわっていた。きれいだねー、すごいねー、来て良かったねーと言いながらみんなニコニコしていた。

下の子が卒業だと言うので、これで学校とも別れたと家族で母も一緒に行った。妻が手配してくれた切符で乗り場を探すと、どうもその車両は2階がグリーン車で、下が普通の指定車両なので、なんだか下の狭いところで行くのもしんどいなと思って乗ったら、グリーン車のほうであった。初めてのグリーン車、すごいね、大丈夫なのといいながら上野からの新幹線は発車のベルの音もないままに静かに滑り出す。東京はいい天気でのどかな景色が窓の外を走ってゆく。椅子の使い方はどうするのかなどでばたばたしているうちに高崎を過ぎ、山が近づいてくる。母が新潟なんて何十年ぶりかと言う。この前の新潟は東京大空襲で焼け出されて、新潟へ疎開して、戦争が終わってから貨物列車に乗って焼け野原の東京へ戻って来た時だったという。鉄の床に座って一晩かかって来た道を新幹線のグリーン車で戻っていく。それもいいね、しかし、グリーン車なんて最初で最後かも知れないね。もうそんなことは出来ないだろーな、などと話しているうちに長いトンネルに入り、明るくなったらもう一面の雪の世界。また長いトンネルというよりほとんど地下鉄状態だが、そこを抜けると吹雪いていた。そんなことの一つ一つにびっくりしつつ感動し新潟へ近づいていく。

幸い新潟駅は雪がなく、改札で待っていた息子と会えて、頼まれていた荷を渡す。彼ももうあと二日で新潟と別れる。3年間、初めての一人暮らしでサッカーへの道を模索していた日々も、もう終えなくてはならない。親といたらいつまでもやらせてやりたいが、やはり、節目節目できっちりと身を処していくことは大切なことなのだ。そんな区切りをきっちりさせるにはみんなで卒業式に押しかけてにぎやかに騒いであげるのも良い手だ。ずるずると行動していくことが一番いけない。と言うわけで、みんなでグリーン車で新潟までにぎやかに出てきたと言うわけだ。ここできっちり気持ちを入れ替えて後は社会人として、今一勝負するのでもいい。思ったとおりの道を進めるわけでもないだろうし、たくさんの妥協もあるうが、いい事だってあるだろう。上の娘も20歳で家から出して一人暮らしにさせてしまったし、生き方は水際立ってほしいと思っている。息子と一緒に卒業するサッカー少年たちの命の力の初々しさにちょっと羨望を感じながらも、これからの彼らの人生に幸いが訪れてほしいものだとしみじみと思った。展望台からの景色は日本海から、港の景色、近代的な町並み、広がる田畑や背後の山々まで私たちの気持ちのように輝き明るく明瞭に広がっている。この日の新潟を忘れずに少年たちは旅立ってほしいと願った。

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>

TEL/FAX03-5600-0195 高村 哲 [GnomesJpn@aol.com](mailto:GnomesJpn@aol.com)